

中世 日記・隨筆

今関敏子 編

監修

藤井貞和

久保田淳

谷脇理史

竹盛天雄

日本文学研究論文集成13
ちゆうせいにつ き ずいひつ
中世日記・随筆

編者 今関敏子

1999年12月26日 発行

発行所 若草書房 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-5興新ビル
電話 03-5281-0366 FAX 03-5281-0369

組版所 マップス
印刷所 恵友印刷
製本所 矢嶋製本

©1999 今関敏子 ほか
ISBN4-948755-54-0C3395
落丁・乱丁はお取替えいたします

中 世 日記・隨筆

江苏工业学院图书馆
全關敏子編
藏 书 章

若草書房

監修

藤井貞和

久保田 淳

谷脇理史

竹盛天雄

編集委員

多田一臣

室城秀之

佐伯真一

長島弘明

中島国彦

関谷一郎

紅野謙介

大橋毅彦

目次

『建礼門院右京大夫集』試論——二つの恋をめぐって——

健御前の八条院追慕について

建春門院中納言日記の執筆心理——その用語を通して——

『弁内侍日記』の和歌についての一考察——勅撰集入集歌との関わりから——

『弁内侍日記』の執筆意図——聖なる時空の創造——

『うたたね』の虚構性

九条家本十六夜日記（阿仏記）について

『中務内侍日記』の風景——書くことの意味をめぐって——

『とはずがたり』と中世王権——院政期の皇統と女流日記をめぐりて——

『とはずがたり』の旅における小町幻想とその現実

『竹むきが記』の構成と執筆動機

翁と童との遊行——『方丈記』の一段を考える——

長明と実朝

『徒然草』における兼好のジャンル意識

徒然草享受の一系譜——正徹・『文学界』・小林秀雄をめぐって——

解説 257

文献目録 267

家永香織 7

三角洋一 26

小松登美 41

村田紀子 53

今関敏子 68

田渕句美子 80

岩佐美代子 95

寺島恒世 130

阿部泰郎 143

寺尾美子 168

大倉比呂志 185

山岡敬和 192

浅見和彦 206

稲田利徳 221

島内裕子 242

日本文学研究論文集成 13 中世日記・隨筆

『建礼門院右京大夫集』試論

——二つの恋をめぐる——

家永香織

一 「隆信歌群」をめぐる諸説

本稿は、『建礼門院右京大夫集』⁽¹⁾（以下『右京大夫集』と略称）中のいわゆる「隆信歌群」⁽²⁾に関する幾つかの問題について私見を述べようとするものである。まず本論に入る前に、当該歌群に言及した諸説を整理しておくたい。

『右京大夫集』に、藤原隆信との贈答歌として詠まれた歌が収録されているという事実は、『藤原隆信朝臣集』⁽³⁾（以

下『隆信集』と略称）との照合により動かし得ない。しかし、右京大夫がそれらの歌をもつて自分と隆信との恋愛の事実を積極的に語ろうと意図していたかどうかは、また次元の異なる問題というべきであろう。常識的に考えて、作品においては隆信の存在を明らかにしない方が、生涯の恋人たる平資盛に寄せる作者の一途な思いはより純粹に見えるはずである。ここに、右京大夫が隆信関係歌を敢えて収録したのはなぜかという大きな問題が生じることになる。

この問題は甚だ魅力的であり、対隆信歌と対資盛歌の

識別の問題とも相俟つて、多数の研究者により様々な論が展開されている。その主流を占めるのは、隆信関係歌は資盛との恋をより効果的に語るための手段として挿入されたという視点に立つものである。関野香澄子氏は「それほどまでに男性に関心を持たれつゝ、しかも一切をしりぞけて資盛一すじに生きた自分を描く事で、物語的效果をあげようとしたのではないだろうか」と述べられ、野沢拓夫氏は、小宰相を平通盛に横取りされた男との贈答の記事（一六四・一六五番）に、作者と二人の愛人との関係を符号させ、資盛との交渉の特異性を際立たせようとしたためとされた。右京大夫は資盛との交渉を事実

に即した形で語り直そうとしたという見解に立たれる加藤睦氏も、資盛との契りの深さを表現したいという作者の願いを読み取っておられる。上條彰次氏は、資盛との愛が大切なものであったからこそ、隆信と恋に陥ったことの弁解をし、それは資盛が冷たかったからだと恕じてみせたのだと指摘された。隆信との贈答歌は資盛との恋を語るための連想として、乃至は資盛との恋の一経過であるかのようにして組み入れられているとする兼子佳子氏説、集の編纂時の作者にとつて隆信は、資盛との愛をより克明に記すための手段でしかなかったとする山本典子氏説、隆信との恋を記すことにより資盛との恋が不思議な因縁に結ばれた宿命的なものであったと訴えようとしたと考える遠田晤良氏説、作者は隆信の求愛を許さず生涯を資盛に捧げたという理想的自己像を作り上げようとしたとする佐藤茂樹氏説も、それぞれ独自の見解を示されているが、資盛との愛を描くことが目的であり、隆信関係歌はその手段であると見なす点では共通している。また今関敏子氏は、右京大夫が隆信の魅力に惹かれたことを認めつつ、彼の存在が右京大夫と資盛の愛情の深さを確かめる試練となり得たと説かれた。

右京大夫と隆信との恋愛はなかったとする見方もある。早くは富倉徳次郎氏による、隆信との関係は頼るべき保護者を求める意味のものであったという御指摘がある。飯田正一氏は「隆信との交渉は、単に、偶然の一件だったといへるのかも知れない」と述べられた。また草部了円氏は「こういうの（一三五番の隆信から作者への贈歌を指す―稿者注）を取りあげて、いちいち恋愛関係に結びつけるという事は、余りにもこの時代の情趣生活を解しない、野暮な今日の視野であるように思われる」と断じておられる。

前記三氏の御説は、右京大夫・隆信の実生活上の関係

を問題にされたものだが、町田友子氏は、そもそも『右京大夫集』から二つの恋の存在は読み取れず、従来対隆信歌群とされてきた一連の恋歌は、資盛一人との交渉を綴ったと受け取るに充分な構成筆致であるとの読み方をされている。

こうした諸説の一方で、隆信との恋に、より積極的な意味を見出す読みも行われている。まず樋口芳麻呂氏は、『源氏物語』の浮舟にも似た生き方をした過去の自分を懐かしむ作者の気持ちを取された。また岡崎三智氏、藤平春男氏、三角洋一氏は、資盛とは違った魅力を持つ隆信にも、作者はかなり心を惹かれていたと解されている。

以上、先学諸氏の御論はいずれも傾聴に値するものであるが、稿者が若干気になるのは、作品の読みが論者の主観により左右される場合がまま見られるという点である。例えば町田友子氏は「対隆信歌と判明しているものを再度眺めてみると、憂いの濃い歌が一首とて見当らない」とされる。一方で岡崎三智氏は、一四八・一四九番については「曙に一人で聞くほととぎすの声に右京大夫は感傷的になり（中略）寂しさを訴えている」、一五一番については「思い悩みながらも袖をかさねてしまったことへの後悔が今さらのように述べられている」という読

みを示されている。作品から作者の心情を読み取ることには無論重要なのだが、より客観的な方法によって作者の意図を探ることはできないだろうか。本稿がそうした方法にどれだけ近付き得るかは甚だ心もとないのであるが、以下些かの私見を述べたいと思う。

二 浮舟物語の影響

右京大夫の自らを浮舟に準える意識を指摘されたのは、前述の如く樋口芳麻呂氏であった。氏の説は以後の幾つかの論に引用されてもいるが、樋口氏自身も引用者も明確な根拠は示しておられない。稿者は樋口氏説を補強する立場から、『右京大夫集』一三五―一五四番歌までを対象とし、表現レベルでの浮舟物語の影響を検討したいと思う。

まず最初に注目したいのは、作者と隆信との出会いを語る一三五番の詞書である。

そのかみ、思ひかけぬところにて、よ人よりも
色好むと聞く人、よしある尼と物語しつつ、夜
もふけぬるに、近く人のあるけはひのしるかり
けるにや、頃はうづきの十日なりけるに、「月の

ひかりもほのぼのにて、けしきえ見えじ」など
いひて、人につたへて。その男はなにがしの幸
相中将とぞ。

思ひわくかたもなぎさによる渡のいとかく袖をぬら
すべしやは
(一三五)

『右京大夫集』中の詞書に具体的な日付が記されている
例は、以下の通りである。

《上巻》

①正月一日中宮の御方へ、内の上わたらせ給へりし…

(二番)

②五月五日、宮の権大夫時忠のもとより…

③九月尽くるあす、還向あるべきに…

(八一番)
(八七番)

《下巻》

④頃はうづきの十日なりけるに…

⑤十二月ついたち頃なりしやらむ…

⑥二月十五日、涅槃会とて…

⑦四月廿三日、明けはなるるほど…

⑧五月二日は、昔の母の忌日なり…

⑨五月五日、菖蒲の御輿たてたる御階のあたり…

(二二一番)
(二六二番)
(二六五番)
(二六七番)

⑩…とぶらひ申すとて、五月五日に、

(三二六番)
(三三〇番)

⑪九月十三夜、ことわりのままに晴れたりしに…

(三四七番)

この他、「四月みあれの頃」(六番)のように日付に代
わる表現がある場合、また「五月のはじめ」(二二〇番・
母の亡くなった日を指す)・「弥生の廿日余りの頃」(二六
八番・資盛の忌日を指す)・「霜月の二十日余りいくかの
日やらむ」(三五四番・俊成九十賀の日を指す)のように、
明確な日付がわかっていながら、それを記すのをおそら
くは意図的に避けている場合もみられる。

さて①から⑪の例の内、①・②・⑥・⑨・⑪は何等か
の年中行事に関わっており、したがって具体的な日付の
示される必然性は高いといえる。⑧の例も、個人的な事
情ではあるが、年中行事に準じて考えることができよう。
③・⑩は、歌の内容が日付と密接な関係を有しているた
め、詞書にそれと示す必要があったものと思われる。残
る④・⑤・⑦の内、⑤は比叡坂本への旅中の詠である。
旅先で詠まれたこと及び詞書中に「雨とも雪ともなくう
ち散りて」とあることに関連して、日付が明記された
と考えることができそうである。また⑦はほととぎすの初
音を聞いた折の詠であり、③・⑩ほどではないにしても、
日付と歌の内容に関連性が認められる。

問題の一三五番は、敢えて結び付けるならば「月のひかりもほのぼのにて」という記述が十日という日付と関連があるといえるが、他の例に比して具体的日付を示す必然性が最も低いといえよう。それにもかかわらず、作者が「頃はうづきの十日なりけるに」と記したのは、四月十日という日付に特別な意味があるからではないだろうか。実は四月十日は、『源氏物語』浮舟巻において、薫が浮舟を迎え取ろうと定めた日なのである。

大将殿は、四月の十日となん定めたまへりける。さそふ水あらばとは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば

：

右京大夫は、隆信との出会いを語ろうとする際に、『源氏物語』のこの場面を思い描いていたのではないだろうか。『右京大夫集』一三五・一三六番の贈答は『隆信集』にも見られるが、詞書中に贈答が行われた時期を示す表現はなく、二人が実際に出会った日を確認する術はない。後年、本集の当該部分を執筆する際、生涯の恋人資盛との関係に、ある陰影を添えることとなった隆信の存在に触れようとした時、彼との出会いを四月十日として記し留めておこうと右京大夫は考えた。また、二人の出会い

が実際に四月十日だったとすれば、なおさらのこと意識的にその日付を残した——このように推定してみたいのである。

次に一三九・一四〇番の贈答歌を取り上げてみよう。一三九番歌は『隆信集』六七〇番として入るが、一四〇番歌は見えない。

そぞろきぐさなりしをついでにて、まことしく
申しわたりしかど、「よのつねのありさまは、す
べてあらじ」とのみ思ひしかば、心強くて過ぎ
しを、この思ひのほかなることを、はやいとう
う聞きけり。さて、そのよしほのめかして、

浦やましかなる風のなさけにてたく藻のけぶりう
ち靡きけむ (二三九)

かへし

消えぬべきけぶりの末は浦風に靡きもせずただよ
ふものを (二四〇)

一三九番に関しては、注釈の多くが次の実方歌を引き、
焚く藻の煙が風に靡くのは女が他の男に靡くことの譬え
であると説明する。

かたらひ侍けるをむなのことひとものいふと
ききてつかはしける

藤原実方朝臣

うらかぜになびきにけりなきとのあまのたくものけ
ぶり心よわさは

(後拾遺・恋二・七〇六)

諸注の指摘は正鵠を得たものであるが、一方『源氏物語』浮舟巻に、匂宮から浮舟への手紙の文言として以下のような表現がみえるのに注目したい。

いかに思し漂ふぞ。風のなびかむ方もうしろめたく
なむ、

こちらは、『伊勢物語』第一二段および『古今集』に
みえる次の歌の影響が指摘されている。⁽²³⁾

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にな
びきにけり

(古今・恋四・七〇八・よみ人しらず)

『古今集』よみ人しらず歌及び『後拾遺集』実方歌は、
藻塩を焼く煙が浦風に靡く情景をもつて、女が他の男に
心を移したことを譬えている点で共通し、共に男が女を
恨む歌の一つの型を形成しているといえる。『源氏物語』
の匂宮の消息文も、そして『右京大夫集』一三九番歌も、
この型を踏襲したものであることは明らかである。隆信
から贈られた一三九番歌を記し留めた右京大夫の意識の
内に、古今歌・実方歌と共に『源氏物語』浮舟巻が影を
落としていた可能性はかなり高いのではないだろうか。

つまり、隆信は匂宮が浮舟を怨じたように自分に恨み言
をいつて寄越した——そのように読まれることを意図し
ていたのではないかと思うのである。

とすれば、男の恨み言に答えた一四〇番歌は、浮舟の
立場で詠まれたことが予想できる。

降りみだれみぎはにこぼる雪よりも中空にてぞわれ
は消ぬべき

これは匂宮により宇治川対岸の家に伴われた浮舟が、
降り積もった雪が夕日に輝く時分、匂宮の、

峰の雪みぎはの水踏みわけて君にぞまどふ道はまど
はず

との詠に対する返歌として詠んだ歌である。右京大夫詠
は煙、浮舟詠は雪の違いはあるものの、どちらへ靡くで
もなく中途半端な状態で漂い、はかなく消えていくもの
に我身を準えている点は一致している。浮舟の歌は、匂
宮により「中空」という表現を咎められた。匂宮は「中
空」の語に、自分のみでなく薫にも傾いている浮舟の心
を感じたのである。一方『右京大夫集』一四〇番につい
て久保田淳氏は、「実はもう愛する男が出来たのに、『靡
きもせず漂ふ物』というのは、もとより、その愛す
る男(資盛)との恋が深く忍ぶべきものであつたからだ

が、結果的には、他の男への半ば無意識的な媚態ともなっている。」「自らを『消えぬべき煙の末』『漂ふ』などと、言わば『はかなだちて』表現する所に、女としての魅力が生ずるのである。』と指摘された。二人の男のいずれにも靡いていないという女の言葉は、当面の贈答の相手の男にとっては、嫉妬心と同時に自分にも可能性が残るという希望をも抱かせるものとなる。しかし久保田氏もいわれるようにこれは飽くまでも「結果」であり、自分の境遇を「はかなだちて」表現することをこそ、右京大夫はまず意図したのであろう。そうした意識の源泉として、「中空にてぞ我は消ぬべき」という浮舟詠があったと考えたい。右京大夫にとってこの浮舟詠は、二人の男から求愛された女がその内の一方の男に相對する時、いかに振る舞うべきかを示す、言わばモデルだったのではないだろうか。

この一四〇番に続く一四一番も、男が女を責める歌である。

また、おなじことをいひて、

あはれのみ深くかくべき我をおきてたれに心をは
すなるらむ

(二四二)

こちらは、浮舟と匂宮の關係を察知した薫から浮舟へ

の歌との関連を考えてみたい。

波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひ
けるかな

言うまでもなく、

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこ
えなむ

(古今・東歌・一〇九三)

を典拠とする。一四一番に古今歌の影響を見る必要はなからうし、薫の『波こゆる』の歌との直接の關係を認めるのも少々無理がある。しかし、隆信詠の場合は、自分が最初に言い寄ったにもかかわらず、資盛に靡いた右京大夫を責める気持ち、薫詠の場合は、自分が最初の恋人であるにもかかわらず、匂宮にも許した浮舟を責める気持ち、持ちが詠まれており、その点で極めて近いものがあるのである。今「隆信詠」と述べたが、「また、おなじことをいひて」という詞書及び歌の内容から推して作者は隆信と考えるのが自然であるものの、『隆信集』にはこの歌はない。隆信は、『右京大夫集』一三九番に相當する「浦山し」の歌に続いて、

かくいひても猶あかずおぼえて

あづまちときくにいとゞぞたのまるゝあぶくま川に
逢瀬ありやと

(六七二)

という自詠を配しているのみなのである。右京大夫が四一・一四二番の贈答を創作したという推定もできなくはないが、隆信がこれらを省いたと見る方が蓋然性が高いと思われる。しかしいづれにしても、薫に責められた浮舟と近似した立場に自分が置かれたことを示す一四一番歌は、『右京大夫集』にとっては省くことのできないものであったということは指摘できるのではないだろうか。

最後に一五二番について検討するが、これを対隆信歌と見るか対資盛歌と見るかは、説が分かれている⁽²⁶⁾。

絶え間久しく思ひ出でたるに、「ただやあらまし」とかへすがへす思ひしかど、心よわくて行きたりしに、車より降るを見て、「世にありけるは」と申ししを聞きて、心ちにふとおぼえし。ありけりといふにつらさのまさるかな無きになしつ
つ過ぐしつるほど (二五二)

ここでは作者を迎えた人物が、隆信・資盛いずれであるかという問題はしばらく措き、「世にありけるは」という男の言葉と、それを聞いて詠まれた歌の表現に着目したい。三木紀人氏は、「世にありけるは」の典拠として次の歌を指摘された。

我が身こそあらぬかとのみたどらるれとふべき人に
わすられしより

(小町集八八／新古今・恋五・一四〇五)

一方『統詞花集』に次のような歌が採られている。

世中をなげきけるころ、人のとへりければ

三条大宮式部

捨果ててなきになしぬるうき身をばよにありとてや
人のとふらん (雑下・八八二)⁽²⁸⁾

男の言葉と歌の表現の双方に関連させることができそうな歌であるが、『統詞花集』のみに見える歌であることを考慮すると、『右京大夫集』の典拠と断ずるのはやや躊躇される。それに比べれば先の小町歌は、広く知られた歌であったということはできよう。

ところで「なきになす」という表現は、右京大夫が好んで用いたもので、他に

さもこそは数ならずとも一すぢに心をさへもなきになすかな (一一二)

ありときかれわれもききしもつらきかなただ一すぢになきになしなで (一一三)

といった用例が検索できる。「なきになす」の和歌における用例として、古くかつよく知られているのは、『千載集』

恋五の巻軸（したがって恋部の最後でもある）に、「題しらず」として据えられた和泉式部の歌であらう。ここでは、『和泉式部集』より引く。

久しうをともしぬ人に

うらむべき心斗は有物をなきになしてもとはぬ君かな
（四二八／千載・九五八）

あるいは、一二番歌、二三番歌、一五二番歌を詠んだ時、右京大夫の念頭にもこの歌があつたかもしれない。しかし、更にもう一首注意しておきたい歌がある。『源氏物語』手習巻で、落飾の翌朝、浮舟が手習に書いたものである。

亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさ
らに棄てつる

この上句は、いずれかといえば二三番歌に近いものがあるが、一五二番歌にも微かに通ずるところがあるのではないだろうか。

以上、二つの恋を語る一連の歌群における浮舟物語の影響を探ってきた。恋の渦の最中にあつた時の真情はともかく、家集編纂時の右京大夫は、二人の男の間にあつた自分を回想する時、浮舟に自己を重ねずにはいられなかつたのではないだろうか。もつともそれは樋口氏が「自

分の若き日の恋は浮舟に似ていたなどと、その感慨を得々と家集中に明記するの愚は、もちろん犯すはずもない」と述べられたように、極めて隠微な形で匂わされているのみであるのだが。

三 「主つよく定まるべし」について

続いて、『玉葉集』に「前右近中将資盛」という作者名で入集する一四七番・一五三番歌について考えたい。まず本節では、一四六・一四七番の贈答を取り上げる。

車おこせつつ、人のもとへ行きなどせしに、「主つよく定まるべし」など聞きし頃、なれぬる枕に、硯の見えしをひきよせて、書きつくる。

たれが香に思ひうつると忘るなよ夜な夜なれし枕ばかりは
（二四六）

「かへりてのち見つけたりける」とて、やがてあれより、

心にも袖にもとまるうつり香を枕にのみや契りおくべき
（二四七）

一四七番歌は『玉葉集』恋三・一五六番として採られている。作者を資盛とするのは選者京極為兼の誤認と